

【小説】ラピスラズリの瞳

木内 真美子

昼下がりにになると、村の子どもたちが自然に一つの場所に集まる。山の頂上付近にあるこの村の中で、唯一開けた場所である。村の儀式や祭りに使われることが多いのだが、普段は子どもたちの遊び場として使われている。

広場にいる子どもたちは、年齢も性別もばらばらだ。他の子どもたちより頭一つ分大きな子もいれば、数週間前に歩けるようになったばかりの子もいる。学校もなく、家の手伝いもする必要がないので、毎日のように日が暮れるのも忘れて、鬼ごっこやなわとびなどの遊びに興じる。まるで遊びが仕事だ、とでも主張しているかのようだが、それは十三歳になるまでの話で、その時になれば、彼らの仕事は遊びではなくなる。

ところが、村の子どもたちの中には、たった一人の例外がいる。母親代わりの女性と二人で暮らしているアライという名の少年だ。彼は太陽アレルギーという特殊な病気のため、日中は外に出られない。外出できるのは、皮膚がかぶれる心配のない夜くらいだ。アライはこの時間に散歩に出る。夜に一人で外に出ることを、母親は安全上好ましく思っていないが、アライの状況に同情して、黙認している。

アライの家の窓には、常に黒いカーテンがかけられている。窓から入ってくる太陽光を防ぐためだ。太陽光の入らない家の中は、常に暗い。極力窓の外を見ないように、母親から言われているが、どうしても見たい時は、サングラスをかけ、毛糸の帽子を目深にかぶり、口を覆うようにマフラーを巻いている。今はちようど、そういう時だった。

家の近くにある広場を見た瞬間、アライはため息をついた。村の子どもたちが、大きな声で笑いながら走り回っている。そこには、彼が永遠に加わることのできない集団があった。

見なきや良かったなあ。

窓に頬を付けたまま、アライは口の中でつぶやいた。窓から少し離れたところに、数日前に枯れた花が見えた。

しばらく経って、外を見ているのが辛くなったアライは、窓の外から離れようとした。だが、誰かの気配を感じ、窓のそばに留まった。

最初は母親だと思ったが、その人物は村人とは明らかに違う服装だった。砂色の布で首から下を覆っている。頭や口の周りも同じ色の布で覆われていて、性別や体型は分かりづらい。ただ、背はアライよりもずっと高く、胸のふくらみもないようなので、青年と見ても、青い瞳のほうに気になった。布の中から群青色の目がのぞいている。アライは彼の容姿よりも、青い瞳のほうに気になった。青年の目は、枯れた花に注がれている。

彼が花を見つめている時間はそんなに長くなかった。すぐに花の側にしゃがみこんで、その上に手をかざした。花が白い光に包まれる。それと同時に、花が元の色を取り戻していく。

1 この光景を、アライは窓にしがみつこうようにして見ていた。彼のような服を着た人物は

この村にはいない。能力に関しては、言わずもがなだ。

子どもたちは鬼ごっこに飽きたようで、すでに縄遊びを始めていた。青年は、彼らの目と鼻の先にいる。しかし、誰も気づいていないようだ。

花が完全に元の姿に戻ると、彼は立ち上がって歩き出した。それでも、子どもたちは気づいていない。

「あ……」

ふもとへ続く道を下りていく青年を、アライは慌てて窓から出て追った。久しぶりに、太陽の光を浴びた気がした。

村から出たところで青年の後ろ姿を見つけた。砂色の布が上下に揺れている。彼の歩くスピードはかなり早い。小走りをしなければ追いつけないくらいだった。

息がかなり上がっている。夜にする散歩以外は、運動らしい運動はまったくしていない。途中で何度も倒れそうになった。だが、青年が何者なのか、どうしても知りたかった。

青年の後ろ姿がはつきり見えるところまで追いついた時、突然、体が前のめりになった。とっさのことで、手をつくのを忘れてしまった。そのまま、顔が地面にぶつかった。

鼻が痛い。顔から転んでしまったようだ。

すぐに気を失いそうな痛みが襲ってきた。耐えきれずに、自分でも驚くほどの大声を上げてしまった。

アライの叫び声に気づいた青年がすばやく振り返った。こちらに近づいてきているが、警戒しているのか、歩くスピードを落としている。アライから少し離れたところで止まった。

「おまえは誰だ？」

青年は、群青色の目でこちらをにらんでいる。敵だと勘違いされているようだ。だが、それを否定しようにも、鼻の痛みが激しくてうめくことしかできない。

「それを治してやるのが先か」

青年はため息をついて、アライのすぐそばまできた。彼の体を起こすと、青年はアライの鼻に手をかざした。先ほどの花を蘇らせた時のように、アライの鼻が白い光に包まれた。

鼻の痛みがどんどん引いていく。一分も経たないうちに痛みは完全に引いた。

「ごめんなさい、驚かせるつもりはなかったんです」

追いかけてきたことを非難されるとは思っていなかった。アライは、申し訳なさそうに顔をうつむけた。

「気にするなよ。別にもう責めてないから。ただ、ずっと後ろをついてくるから、追っ手だと思ってたんだ。見るからに怪しい格好だし」

アライは、自分の腕や足を見た。長袖長ズボンの上に、手袋までしている。更に顔にはサングラスにマフラー、頭には毛糸の帽子をかぶっている。青年が怪しい格好だと思うのも無理はない。

「それにしても、何でそんな服着てるんだ？ おまえみたいな子どもには似合わないだろ」

「ぼくもそう思いますけど……：：：しょうがないんです、太陽アレルギーだから」

「太陽アレルギー？」

聞いたことのない名前だったらしく、青年は首をかしげた。

「太陽の光に当たると、肌がかぶれちゃうんです。だから、外に出る時は肌が出ないよう

にしているんです。本当は夜まで出ないほうがいいんですけど」

「おいおい、大丈夫かよ？」

「大丈夫じゃないです……」

夕暮れ時の太陽光がまぶしい。伸びてくる光に目をやられないように、額の上に腕をかざした。いまかけているサングラスでは、太陽光を防ぎきれない。

「おまえ、もう帰ったほうがいいぞ。家はどこだ？」

「この道を上っていったところですよ」

アライは、村の方向を指した。青年は納得した様子でうなずいた。

「なるほど。俺が花を蘇らせたのを見たから、追いかけてきたんだな」

アライは謝ろうとしたが、青年は気にするな、と言って手をひらひらさせた。

青年は村の方向に向かって歩き始めた。アライはそれを慌てて追いかける。

「疑ったお詫びに、近くまで送ってやるよ」

「あの、そんなに気をつかってもらわなくても、ぼくは一人で……」

「子どもを放置しないのが俺の主義なんだ」

青年は、後ろを歩いているアライの方を振り向いた。今度は、優しい目をしている。

「あと、これを持ってたら、ちよつとは良くなるかもしれないぜ」

青年は、アライに向かって何かを投げた。何とかそれを受け取ると、アライは手の中のものを見た。こげ茶色の小さな巾着袋だった。中に固いものが入っているようだ。

「これは……？」

「魔除けだよ。おまえにやる」

「えっ、でも、」

「俺には、もう必要ないんだ」

青年はまた前に向き直った。砂色の布が青年の顔を隠していて、表情はよく見えない。だが、彼の背中からは、あまり明るくない過去を背負っているのが感じられた。

彼とは、村の入り口の近くで分かれた。泊まる当てがないようなので、アライが自分の家に泊まるように勧めたが、青年は、迷惑になるからと言ってかたくなに拒んだ。

アライが玄關の扉を開ける頃には、すっかり太陽は沈んでいた。扉を開けてすぐのところ、母親が仁王立ちしていた。黙って家を出たことをとがめられ、思いつきり平手打ちされた。母はしばらくアライをにらんでいたが、突然泣き出した。申し訳ない気持ちでいっぱいになったアライは、母親が泣きやむまで抱きついていた。

昨日のことを思い出しながら、アライはふもとへ降りる道を歩いていた。窓から外に出る時、誰かに捕まって家に戻されはしないか心配だった。だが、誰にも見とがめられることはなかった。

昨日、魔除けの中身が気になって、寝る前にこっそり袋を開けた。袋を逆さにすると、青年の目と同じ色の小さな丸い石が一つ出てきた。石には、象牙色の筋や金色の粒子も混じっている。この石は昔、凶鑑で見たことがあった。ラピスラズリだった。前に、魔除けの効果もあると、何かで聞いたことがある。アライは、それが本当なのか確かめてみたくなったのだ。だから、今日は、昨日のように肌を隠していない。

しばらく歩いてから、アライは自分の手を見てみた。手袋をしていない手は、太陽光をたくさん浴びているにもかかわらず、元の白い手のままだ。ラピスラズリには、本当に魔除けの効果があるようだ。

昨日転んだ場所とおぼしきところまで来ると、誰かに声をかけられた。聞き覚えのある声だった。

「魔除けが効いてるみたいだな」

「もしかして、ずっとここにいましたか？」

「まさか。通りかかっただけだよ」

それは嘘だとすぐに分かった。砂色の布にちぎれた草がいくつかついていた。この辺りには草原が広がっている。青年はアライに近づいてきた。

「そういえば、自己紹介がまだだったよな。俺はリヨンだ。おまえは？」

「アライです」

「ふうん、女みたいな名前だな。誰がつけたんだ？ ……ってそんなに怒るなよ」

アライは口をとがらせていた。名付け親の母親には悪いが、自分でもこの名前は気に入っていない。名乗るだけでも嫌なのに、名前に触れられるのはなおさら気分が悪い。

リヨンもそれを察したのか、名前の話はすぐにやめて歩きだした。アライも少し遅れてリヨンについていく。

歩き始めてすぐに、リオンはアライの方に向いて話しかけた。

「言っておくけどな、アライ、俺に敬語を使う必要はないぜ」

「でも、年上だし…」

「いいんだよ。俺たちの間に上下関係はいらない」

それだけ言うと、リオンはまた元の方向に向き直った。血のつながらない母親も同じようなことを言っていたのを、アライはふと思いついた。

ある場所へ留まっては移動して、をくり返ししながら、二人は様々な話をした。家族の話、自分が生まれたところの話、最近のニュース。それも他愛のない話ばかりだった。

あたりはすっかり暗くなっていた。今日も母親に行き先をはっきり告げていない。母親には悪いが、リヨンのことは秘密にしておきたいのだ。母親が心配しているから早く帰ったほうがいいだろう、とリオンに言われたが、無理を言っ、もう少し一緒にいることにした。

何度か移動を繰り返した後、適当な場所を見つけて、二人で座って話すことにした。場所を見つけると、近くから小枝や草を拾ってきて火をつけた。周りがぼんやり明るくなる。

二人はたき火の前に座った。

「さつきより星が増えたね」

「ああ」

「わがままを言っごめんね」

「構わないけど、お母さんが心配してるだろ」

「そうなんだけど…」

アライは視線を落として橙の炎を見つめた。リオンも黙ってしまった。

話題を変えたくて、アライはもらった魔除けのことを聞いた。

「どうしてあれをぼくにくれたの？ リヨンの大事なものじゃないの？」

リヨンが自分の瞳と同じ色の石を持っていたのは、偶然とは思えなかった。誰かがリヨンに贈ったものだろう、とアライは考えていた。

「昔の話だけだな」

「どういうこと？」

「もう俺には魔除けが必要なくなった。俺が『魔』そのものだから」

その後は、リヨンはたき火を見つめたまま一言も話さなかった。今の言葉がどういう意味か聞こうとしたが、答えたくなさそうだった。

橙色のともし火を、二人は無言のまま見つめていた。

昼にふもとへ降りる道の途中で落ち合って、夜まで二人で語る。そんな生活が二ヶ月続いた。その間、アレルギーの症状はまったく出なかった。もらったラピスラズリの効果は持続していた。

いつもと同じように、ある場所に留まっては移動してをくり返していると、リヨンが歩きながら、例のラピスラズリの話を始めた。

「あれさ、弟が俺のために磨いてくれたものなんだ。兄さんにぴったりの石があるからって言ってるさ。…でも、弟は死んだ。いや、殺されたんだ」

アライは、リヨンの話に息をのんだ。

「村のやつらに、盗みをやったと勘違いされてリンチされた。でも、犯人は村長の息子だった。しかも、そいつは弟が死んでから名乗り出たんだ。村のやつらも弟は死んで当然だって言われた」

リヨンは、歩きながらずっと地面を見つめている。アライのことなど目に入っていないかのよう。

「その後のことはよく覚えていない。気づいたら、村のやつらは一人残らず死んでいた。右手に持っていたものを見て初めて、俺が全員殺したことに気づいた」

アライは何も言えなかった。こういう時にどう反応すればいいのか分からなかった。

「…話さないほうが良かったかな」

リヨンは顔をくもらせた。アライは、それを打ち消すように首を振る。

「話してくれて良かったよ。つらい話は誰にでもできるものじゃないもんね。ありがとう、リヨン」

「そう言ってもらえるとありがたいな」

リヨンは顔の周りを覆った布の中で微笑した。目しか見えなかったが、それは力強いものではなかった。アライは不安になって、リヨンの袖をつかんだ。

「これからどこへ行くの？」

「分からない。ただ、もうここは出る」

「嫌だよ」

アライは袖をつかむ手に力を入れた。

5 「やっとなんか仲良くなったと思ったら、もうお別れ？ 理不尽にもほどがあるよ」

「すまん……」

リヨンは声をしぼり出すようにして謝った。服をつかんでいるアリの手をそっとほどくと、夕陽と逆の方向へと歩きだした。アリイは、リヨンを追いかけようとしたが、足が動かない。どんなに浮かそうとしても、地面から離れない。

少し離れたところでリヨンは止まった。アリイの方は向かずに話し始める。

「ラピスラズリをやったのは、おまえが弟に似てたからなんだ。弟は死んじまったけど、おまえは弟の分まで生きていてほしい。俺は、罪を償いに行く」

彼は再び歩き始めた。彼の背中に、アリイは精いっぱいの声で叫んだ。

「リヨン、また会おうね！」

彼は振り返らず、何も言わなかった。だが、代わりに軽く手を振っていた。

砂色の布が見えなくなるまで、アリイはその場に佇んでいた。